レッスン：5"A"

テーマ：探求の始まり

QUEST5"A"/DOC/ENA.

私たちの兄弟姉妹であり、

スピリット、光、火の子供たちへ。私たちは常に絶対なる神、聖なる存在に包まれています。

この世界に誕生した赤ん坊は、その人生の始まりにおいて、無意識に生きておりセルフ・エピグノーシスを表現していません。生まれたばかりの赤ん坊は本能的に、生存するために必要なこと、欲求を満たそうとします。

生存および種の存続のための本能的衝動は、人類のみならず植物、動物界においても驚くほど強力です。例えば、亀は自分が孵化した場所に戻って卵を生むために、何千マイルも旅をします。同じように、鮭は非常な困難を乗り越えて、海から川に戻ってきて、そこで卵を生んで死にます。

**子供は産まれてから数年間はセルフ・エピグノーシスがありません。**

しかし、その生成における聖霊的局面にはある種のエピグノーシスがあります。

現象的には懐妊、胎児が育つための揺りかごである母親の子宮の使用、そして実際の出産という点で、両親は子供の創造者であるわけです。それ以外に関しては、最も完全な人体の創造のために子宮内で行なわれている実際の活動について、本当に気づいている人は誰もいません。

妊娠の時点から母親の子宮の中で胎児が成長し始め、７カ月から９カ月後に胎児はこの世界に入る用意が出来ます。

人類は男女の性の違いを別にすれば、全て同じ形をしており、外側と内側の構造は全部同じです。問題は、一体誰がこの成長のプロセスに関わっているのかという点です。人体を詳細に調べてみると、それが素晴らしい構造であることがわかります。肉体的には、骨と筋肉の働きを通じて様々な動きが可能となります。同時に、敏感な様々な器官にはその脆さ、機能、敏感さの程度に応じて様々な保護が与えられています。いろいろな器官は正確に、効率良く働いており、人体は今までに存在した中で最も効率的なコンピュータでコントロールされる、最優秀の素晴らしい組み立てラインであると見なされています。

このような素晴らしい人体の創造において、人間はどれだけの貢献をしているでしょうか？たんに必要なエネルギーを作るために、燃焼のための食べ物を提供することでしょうか？

人体の細胞は７年で入れ替わると言われています。問題は誰がそれを決め、維持し、矯正し、再生し、また何時・何処で・如何にするかを決定するかということです。そういった身体の機能を誰が決め、誰が監督するのでしょうか？

なぜなら、少なくとも18年間は、人体は全てが数学的正確さで発達するように調和的に成長していくからです。

人体はその大きさを増しながら成長していきますが、この成長は多数の各細胞内部で行われ、その結果、目に見えないぐらいに完全なバランスをもって成長していきます。生まれたばかりの赤ん坊を見て、微細な部分まで全て完全に形成されている人体の形に驚かない人がいるでしょうか？ですから、全ては身体の各細胞内の神秘的パワーによって成長していき、そこに関与している働きの大きさを測定することもできますが、一般にそのような偉大な働きは当然のことと見なされています。

それでは、この驚異的な仕事を行っているのは一体誰なのでしょうか？この機能を果たしているのは創造エーテルであり、聖霊の監督の下に行っています。物質は一定の法則に従っており、その結果、全ては絶対英知（All-Wisdom)によって造られ、維持されています。物質が従っているそれらの法則は、あらゆる人間において、その人が善を表現しようが悪を表現しようが、同じように機能しています。

この生命現象は、特定の目的に奉仕するための神聖な贈り物です。私達はこれらの目的を順を追って勉強していきます。さらに、真理の探求が進むに従い、生命現象とは何か、本当の生（Real Life)とは何かを勉強、検討してきます。

人体の驚異、それが聖霊の全英知を通じてどのように造られ、維持され、監督されているかをお話しました。同時に、周囲の植物界、動物界においても不断の奇跡の連続があります。また、目を上に向ければ、宇宙の広大さに驚くばかりですが、それとても、肉眼あるいは望遠鏡を通じて見える僅かな部分にしかすぎません。宇宙全体は人間の理解を越えています。

想像力が刺激されると畏怖感に襲われてしまい、頭脳がついていけなくなります。そのような正確さと調和をもって全てを結びつけている絶対英知・絶対善・絶対パワーのリアリティーが認識され始めます。

科学はこの調和の取れた正確さに着目し、それを数学的に計算し、未来における運行のサイクルや出来事を予測します。全てにそれぞれの場所があり、全ては宇宙内の法則に従って運行しています。

宇宙には絶対英知が満ちています。人間の頭脳では宇宙における絶対英知の大きさと偉大さを理解することは不可能です。

人間は自己中心性から遠ざかるにつれて、その偉大さにいくらか気づき始めるようになります。これは各人によって異なり、一定のパターンとか年齢とは関係ありません。

人間は季節の移り変わり、太陽の変化、潮の満ち干の神秘、植物の成長などの奇跡的なサイクルの連続を常に目にしていますが、それらの現象について問いを発するようなことはしません。ある日、何かが起こり、それがその人の好奇心を刺激し、問いを発するようになり、それが一連の問いの雪崩現象の始まりとなり、次々と雪崩のように問いが出てくるようになります。これが探求の始まりと言えるかもしれません。

時の経過と共に、存在するあらゆるものの背後にある生命と不可思議なパワーの神秘に目を向け、多くの宗教や信念に従うようになりました。ほとんどの場合、啓発を求める人間は宗教や信念を自分が理解できる大きさ、レベルまで下げています。さもないと理解できないからです。時と共に元々のオリジナルな概念が変化するのを、目にすることがあります。そして、現在の解釈をオリジナルな真理であるとして受け入れてしまう大きな危険性があります。

ロゴスは「真理を知りなさい。そうすれば真理によってあなたは無知の絆から解放されるであろう」と言いました。ですから、私達は探求において、確認・検討しながら自分たちが選択した真理の道に出来るかぎり沿って進むようにし、同時に、自分たちの認識レベルに合うように真理を歪めてしまう危険性に絶えず注意を向けながら進むほかありません。

　ロゴスは「丘と山以前に私が存在する」と言いました。過去・未来という概念がなく現在しか存在しない現在、永遠の現在について述べ、時間・空間という状況から離れたのです。ロゴスはまた自分自身について、「道であり、真理であり、命である」と言いました。

これらのロゴスの言葉には偉大な真理が含まれており、真摯に学ぶことによってそれらを完全に理解する必要があります。勿論、私達には同時に実際的なアプローチ、態度も必要です。深さもロジックもない宇宙の論理に留まってしまうことなく、できるだけリアリティーに近づくためです。

ロゴスの言葉は数多く語られ、これからも語られると思いますが、しかしそれらの多くは、丁度私達が多くの奇跡的な生命現象について深く考えることなく見過ごしてしまうのと同様に、意味のない空虚なものとして見過ごされてしまうかもしれません。多くの場合、私達は目を向けても実際には見ておらず、耳に聞こえても実際には聴いていないのです。ですから、困難な道を登るにあたり、私達は進む方向に深く注意を向け、また足場をしっかり踏まえて進む必要があります。

絶対存在を論理で理解しようとするのは不毛な努力です。しかし、私達はいずれかの場所から出発し、しかも、最初のステップに向かって進むにあたり、利用できる道具と共にスタートするしかありません。

そして最終的には、絶対エピグノーシスとの同化、宇宙との同化、全てがそこを通じて造られた「キリストのロゴス」との同化に向けて導かれるのです。

自分たちの認識レベルに合わせて引き下げることのないように注意した上で、それらの真理にどのように対処したらよいのでしょうか？落とし穴にはまることなく、真理に向かって進むには正しい思考、分析、そして観察が必要です。

　真剣に熟考する時には常に、一定の立場を取ろうとせずに受容的姿勢を保つ必要があります。様々な観点から問題に対処する姿勢を保ち、時には再び元に戻って再検討する心構えも必要です。物事に対する人間の認識または理解がいかに変化するものであるかは、私達が知っているとおりです。

全体として、かなりの時間の経過と共に私達の考え方も変化します。内省によって、問題により深く注意を向けて取り組むことができるようになり、変化に対する気づきもより速くなります。本を読んで、その内容を100％完全に理解したと思っても、しばらくしてから同じ本を再読すると、その内容に驚くことがよくあります。前には見逃していた点に気づき、異なった光によって意味を理解することもあります。

以前に頭の中を占めていた先入観、姿勢が解消したので、再読した時にはなぜ以前には今のように理解しなかったのかと訝ることもあります。同様のことは音楽鑑賞、絵画の鑑賞、詩の鑑賞、あるいは周囲の環境を見る際にも起こりえます。

　人間は太陽の恵み深い光を理解・享受し、もし太陽の光がなければ地球上の物質的存在は死滅し、同時に物質的現象としての人類も死滅することを認識しています。しかし、それを理解しているからといって、人類が太陽の構成、構造を理解できるというわけではありません。

同様に、人間はいわゆる、霊的な太陽、つまり私達のサイキカル体とノエティカル体に影響を及ぼしているロゴス、聖霊、絶対存在へ目を向け始めるかもしれません。いかにして、そして、どのような形態でこの霊的太陽は現れるのでしょうか？霊的太陽は、愛あるいは相対的愛以外のどのような表現をとることができるのでしょうか？ここで、“相対的”という言葉を意図的に使用しました。なぜなら、人間自身が愛、生命、真理それ自体になり、神の意志とひとつになる迄は、時間・空間にいる人間が真の愛・生命・真理にアプローチすることはないからです。あなたの意志は神の意志とひとつになることでしょう。神の意志以外に意志はありません。「汝の意志はなされた」(Thy Will be done)。

この道を辿るためのスピリチュアルな姿勢、スピリチュアルな方法があります。まず、清浄になり、愛の受け台となるためにハートを浄化する必要があります。あらゆる人々に向けて神の愛を反射するために、サイコノエティカルなハートが、輝く鏡とならねばなりません。これが私達の神の愛との最初のコンタクトとなるでしょう。

自らのエゴの中に閉じこもった人間は、どのように愛し、どのように与えるかを知らず、また、愛の贈り物をもって他の人々が近づくのを受け入れることもできません。神の愛は宇宙に遍満し、粗雑な物質界にもサイキカル界にもノエティカル界にも充満しています。このコンタクトはマインド（Mind）を通じて行なわれますが、この場合、マインドとは粗雑な物質界の頭脳のことではありません。あらゆるものはマインド（Mind）であり、マインド（Mind）の様々なバイブレーションを通じて行なわれます。

幼い子供はあらゆるものを自分の物だと言います。学ばねばならないレッスンのひとつは、このような枠、つまり「私のもの」と呼ぶ必要性から解放されることです。私達がこのような傾向から解放されると、全てが私達のものであると感じられるようになり、あらゆるものを享受する自由を得ることができます。

私達の周囲の粗雑な物質は、目的に奉仕するために存在しています。それは全ての人間に与えられた神聖な贈り物であり、誰もがそれを利用することができます。そのために、私達にはそれを浪費することなく維持する大きな責任があり、同時に、誰もが平等にこの贈り物を享受できるようにそれを浪費しない責任があります。

また、環境の変化によってその価値が喪失するか、または破壊されてしまうような世俗的物品を飽くことなく収集し、貯蔵するという無駄な行為を目にすることがあります。富は、時に、外的な変化によって瞬時に変化します。それらの変化が自然災害によるものであろうと、国同士の侵害によるものであろうと、個人的侵害によるものであろうとも同じです。

結局、長期的な満足のためには世俗的物品に頼ることなく、自分の内側を深く見つめて真の安定を求めるほうが理に適っており、合理的であり、より健全でもあります。しかし、物の魅力には理論として偉大な英知を述べる人でも、人生のある時期に物品の魅力の犠牲になってしまうような所があります。

　その理由は、理論が理論のレベルに留まり、その人の毎日の現れにはなっていないからです。それゆえ、理論とその実践、体現は異なります。ですから、長い間真理を探求しているのにどこにも到達した感じがしないという場合、その理由はその人が聖者の言葉や書物の単なる収集家になってしまい、そこから何の効果も得ていないからです。それらは感情を魅惑し、儀式的なこと、芝居じみた感覚に対する欲求を満たすかもしれませんが、その人の存在の核には全く触れずじまいになっています。これらのポイントについては将来再び触れるつもりです。

　真理の探求においては、所有を否定したり、物質的なものを得る目的では働かないとか、物質的なものを享受しないということを唱道することはしません。それどころか、自分が置かれた立場で出来るだけ一生懸命に働くことは私達の義務です。しかし、物質的なものに意識が固定されてしまい、その先には何も存在しないと信じるようにならないよう注意しなければなりません。真理の探究者が物質的なものを必要に応じて、便宜上、そして他人を益するために使用する限り、それに魅了される危険はありません。

　外的なものに基づいて幸福を求めるべきではありません。なぜなら、その場合、最終的には失望することになるからです。もし周囲を見渡してみれば、現象的なものは最終的には私達を満足させないことに気づくでしょう。しばらくの間はそれに感動し、夢中になり、魅惑されるかもしれませんが、しかし当初の目新しさが消えると、興味もあせて、不満足が芽生え、究極的に本当の探求が始まります。「内なる天の王国」は苦行、禁欲主義によって求めるのではなく、他人の厄介にならず自由に自分の生計を維持し、自分の運命を自由に選択し、自分の運命の主人となることを通じて求めるべきです。

他人の狭量な行為に影響されたり、自分の中に偽善的、あるいは貪欲な行為を誘発すべきではありません。真理の探究者は他の人間と接触する時、その動機に非常に注意を払う必要があります。なぜなら、人間はそのような接触を通じて、究極的に自分自身の体（＊肉体、サイキック体、ノエティック体を含む）の主人となるからです。人間を特定の段階に置くのは動機であり、それらの動機が基本的に、その人の上昇への道における時空間での表現レベルとなるからです。

周囲を注意深く見渡してみると、自然界には不断にエネルギーがあり、あらゆるものの中にそれを見いだすことができます。私達が自分自身の想念と感情の主人となり始めると、あらゆる形態のパワーとエネルギーを自分の支配下に置くことができるのを認識し、また次第に粗雑な物質界の主人となり始めると、キリスト・ロゴスおよび聖霊としての絶対存在の偉大さが理解できるようになります。真理の探究者は、聖なる思考（Divine Thought)および神のブレーシス（＊神の意志）の中に入り始め、普遍的超意識（Universal Super Mind）の中に取り込まれ始めます。

真理の探究者の究極的目的は何でしょうか？パワーを得て、周囲の人々の羨望の的になることでしょうか？そして、人々の注意を引くためでしょうか？テレパシー、空中浮揚の能力を開発したり、物質化・非物質化ができるマスターになるためでしょうか？

探究者がサイコノエティカルなレベルの主人となると、感情およびサイキカルなものとは何か、思考およびノエティカルなものとは何か、という知識を獲得し、ある程度普遍的意識(Universal Mind)に同調できるようになります。

そういったサイコノエティカルなパワーを表現できる状態に到達すると、それらのパワーがインナーセルフの本質と無関係ではなく、むしろそれらのパワーは自分自身の現れとして表現されることを認識するようになります。

　私達は今、分析に入り、「私は誰か？」、「私とは何か？」を問います。名前を呼ばれて返事をするこの私という人間が、私のインナーセルフであるか否かを問い、もしその答えが「ノー」であるなら、永遠の中を動き、それゆえこの滅びゆく人体、時間・空間内の存在ではないインナーセルフがあるはずです。

**私とは生命現象におけるパーソナリティー（個としての人間）であり、不断に変化しています。ひとたび生命現象界から去ると、性・人種・年齢を越えたインナーセルフの中に引きこもると結論づけることができるでしょう。**

聖パウロは、現在のパーソナリティーは絶えず死んでいくと言いました。時間・空間の意味の中で生きる現在のパーソナリティーとして、私達は個人的名前、多くの欲望、そして不断に変化する認識という限界の下にあるセルフ・エピグノーシスの限られた現れを認識します。

　次第に、超意識のセルフ・エピグノーシスの始まりと呼ばれる変化が起こり始めます。別の言い方をすれば、

**小文字の私「i」が大文字の私「I」として、魂のセルフ・エピグノーシス（Soul Self-Epignosis）としてそれ自体を表現するようになるのです。**

**キリストは、「決して死を味わうことのない存在になるであろう」と言っています。肉体の死がないという意味ではなく、**

**魂のセルフ・エピグノシスとしてセルフの永遠の部分に入り、知覚の消滅による中間期間がなくなるという意味です。**

大部分の人間にとって、知覚の消滅は毎日、睡眠と共に起こっています。そこでは、夢も印象もなく、たとえ夢や印象があっても、あなたは単なる観察者になっています。

そのような状況の受容体となると、私達は次第に、幸福は自分自身に関する深い理解と知識を通じてのみ得られることを認識するようになります。

私達のインナーセルフは外的なものは何も必要としません。なぜなら、自己充足しており、愛によって高揚しているからです。「隣人を自分自身のごとく愛せ」という最も素晴らしい教えを適用するのは、私達が試練と苦しみの中にある時です。絶対存在を愛し始めるためには、まず、同胞の人間を愛することから始めなければなりません。

　真理の探究者である私達の最初の目標は、瞑想と探求を始めることです。感情とは何か？想念・思考（thought )とは何か？肉体とは何か、肉体は私達に何を与えてくれているか？正しく使用するなら、肉体は私達に何を与えることができるのか（正しく使用していないので、今はそれを受け取っていないが）？道は遠いですが、しかし同時に、最終的に私達は成長に向う上昇の道に面して立っているという認識による満足感、そして踏み出そうとしているステップを十分に理解しているという満足感があります。漫然としたあてのない探求ではありません。

探求と努力は実を結ぶでしょう。しかし、前に進みたいという熱望の中で脇道にそれたり、落とし穴に落ちないように用心する必要があります。いかなる上昇への道においても、常に簡単に流れるように見える流れに運ばれてしまう危険性があり、万一あなたがそのような力に流されるなら、あなたにはそれを止める力はないでしょう。

真理の探求という道では、誰もあなたを車に乗せて運んであげることはできません。しかし、あなた自身の馬に乗るための助けを得、脇道にそれることなく道をまっすぐ進むために注意を受けることはできます。そしてもし、道のりが困難で身体が傷だらけになり疲れ果ててしまったら、寄り掛かる肩がありますし、馬から下りないように勇気を与えられることでしょう。

私たちは常に絶対なる神、聖なる存在に包まれています。

5A/.6END

EREVNA/QUEST5A/EN/DOC/